作業療法士などの専門職者として働くことを希望しており、子どもプログラムにおいて1：1で子どもの介助にあたった。子ども達の行動量、保育スペースを考慮し、子どもの受け入れ人数は、毎回、20人前後までとした。全体のプログラムの統括者以外に、通園施設の保育士、作業療法士、保健師として5－15年の経験を持つリーダーが4－5名の学生に一人ずつインストラクターとしてついた。

集中できる時間が限られているという発達障害の特徴から、概ね30分区切りで遊びを設定した。(図6、7)。また、視覚的に理解できるタイムスケジュールカードを作成し、目につきやすい位置に掲示した。広い空間を、遊具エリア、工作エリア、おもちゃエリアなど遊びの種類に応じて、パーティションで区切り、一つの遊びに集中しやすい環境を作った。

図6. 設定遊びのいろいろ（須磨）

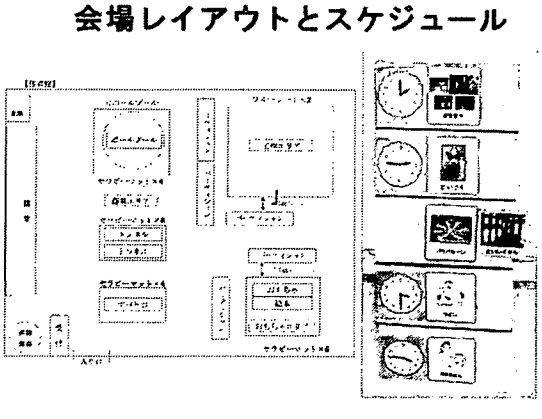

図7. 会場の区切りとスケジュール（須磨）

研修を受けるボランティアは、インストラクターの指示に従いながら、個人の発達段階に応じた保育に努め、終了後に行動観察記録を記載した。

子どもプログラムでは、回を重ねるに従って、ボランティアの動きに無駄がなくなり、観察記録も的確になってきた。子ども達も場所に慣れてきて、当初は動き回っていたのが、設定保育プログラムに参加できるようになった。数回、参加すると「教室を楽しみにするようになってきた」などの声が寄せられるようになった。

表3　子どもぷログラムへの感想（灘）

- 子どももすごく嬉しそうでした。私が気にしている動きを「感情表現が豊かでカワイイですね！！」と言われすごく嬉しかったです。いつも外でしたら周りの人が「変な子？」みたいにじーっと見られ笑われることもあるので、そういう見方をしてもらえたのが嬉しかったです。ありがとうございます。
- 今日、初めてなので設備についてよくわかりませんが、保育して下さっている方がとても親切で良かった。
- 子どもの好きなことをしてくださりありがとうございました。お友達の真似をしたりできたと聞きすごく嬉しかったです。
- 子どもは、楽器も歌も好きなのでとても良かったです。合間に絵本 etc 取り入れて頂いたので、子どもの気持ちが長続きしました。
- クリスマス会、とても楽しかったです。
- 子ども達はいつもボランティアの方に遊んで頂いてとてもうれしいみたいです。ありがとうございました。

D. 考察

私たちが運営してきた発達支援教室は、家族への支援だけではなく、この教室を通じて、保健師、保育士などの専門研修、支援者（ボランティア）養成を目的としている。専門職者には、それまでの経験によって、子どもの介助や講習会でのファシリテーター、プログラム企画などの役割を振り当てている。また、本教室と密接にリンクして実施されている個別支援教室の補助指導者としても参加している。講演を単に聞くだけではなく、自分自身が主体的にプログラムの中での役割を担うことによって確実に知識を身につけることができるように配慮している。支援者（ボランティア）の多くは、臨床心理士、保健師、保育士などをめざす学生であった。彼らにとって、直接に発達障害の子どもたちと触れる機会は教育経験として貴重である。これらの支援者には、12回の参加でほぼ基本的な知識が身につくように計画している。12回のクールを終えた学生は、専門職者とともに教室全体の運営責任者や各パートのリーダーとして企画業務に携わった。多くの分野の専門家が一緒になって取り組むこのような教室は、チーム医療、チームアプローチを学ぶ上でも大変有意義なものとなっている。また、「すまいるぽっとらっく」では、支援者として高校生や地域の子育て支援ネットワークのメンバーを取り込んでいる。発達支援教室を地方都市で実施するときには、私たちの教室のように多くの学生ボランティアを集めるのが難しいと考えられる。そのような時に、高校生や熟年者を地域コミュニティでの支援者とすることが重要となってくる。年齢や経歴の違う人々がボランティアとして集うことは、コミュニティづくりの上でも大きな意義を持っている。

支援者をいかに集めるか、そして、教室の学習効果をいかに客観的に評価していくかは今後の大きな課題の一つである。

毎年、3月が近づくと就学後の不安や希望が家族から多く寄せられる。本教室は未就学の幼児を対象としているため、就学後は対象外となる。連続して会に参加してきた家族の中には、自分たち自身で自助グループを作りたいとする積極性も見られるようになった。このような家族を支援するために、月1回でも自由に家族が集まれるサロンの設置を計画している。それには、小学校などの教育関係者とより緊密な連携を行っていく必要がある。本研究班で作成した「サポートブックの作り方・使い方ガイド」は他機関との連携を考える時に大変有用と思われる。私たちも子どもを預かる時の子どもの記録をサポートブック形式に変えようと考えている。

表3　就学後の不安（灘）

- 小学生の子供がいるので、少し大きくなった子ども対象の話もしてほしい。
- 小学校のことをいろいろ知りたいと思っています。
- 小学生対応の会もあれば良いなあと思います。
- 子供と同じような就学前のお母さん方とお話することができていい時間をすごせました。ありがとうございました。
- 他の親御さんともっと長い時間話をすることができたらいいなと思います。

これまで発達支援教室を運営してきた経験を生かすために発達支援教室運営マニュアルを編集した。もちろん地域によって状況は異なると思うが、それらの部分を修正しながら使用すれば、実践的な活用が可能と考えられる。今後、発達支援教室が全国に広がることを願っている。

E. 結論

発達支援モデル教室の活動は、子どもたちと家族だけではなく、専門職教育、支援者養成にも有用であった。これらのモデル教室の経験をもとに発達支援教室運営マニュアルを作成した。このマニュアルを地域の実情に合わせてカスタマイズすれば、コミュニティに根差した支援体制づくりに大変有用と考えている。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

【論文発表】

1) 高田哲　軽度発達障害児によくみられる症状　小児内科(39)　171-173、2007

【学会発表】

1. Takada S. Experience on interdisciplinary cooperation network for profound handicapped children's care in Kobe. Chinese Association of Early Intervention Programs for children with Developmental Disability. 2007 September 29-30th (Taipei) Taiwan

2. 高田哲　軽度発達障害について　兵庫県小児科医会　第48回小児医学講座　2007年12月8日　神戸

3. 高田哲　障害のある子どもと家族への支援　-神戸大学の地域連携事業として一. 滋賀県小児保健学会　10月6日　滋賀県守山市

4. 高田哲　発達障害の早期診断と支援　第18回ハイリスク児フォローアップ研究会　講演　2007年5月20日　東京

5. 高田哲. 松田宣子、山根弘子、他. 家族教育と専門職教育を同時に行う発達支援モデル教室の運営　第54回日本小児保健学会　2007年9月20-22日　前橋

【シンポジウムなどの講演】

1. 高田哲. 保健師・保育士による発達障害児の早期発見・対応システムの開発 恩賜財団母子愛育会公開シンポジウム 2008年3月7日

2. 高田哲　発達に遅れを持つ子どもたちへの支援　第4回ダウン症療育研究会 2008年2月23日　尼崎

3. 高田哲　発達障害のある子の家族、支援者へのアドバイスの仕方　日本小児神経学界　第2回プライマリケア医のための子どもの心の診療セミナー　2008年2月10日　神戸市

4. 高田哲. 保健師・保育士による発達障害児の早期発見・対応システムの開発 厚生労働省雇用均等・児童家庭局　母子保健課勉強会　2008年1月30日　東京

5. 高田哲. 発達障害児と家族のための支援教室運営とその課題　厚生労働科学研究補助金事業（子ども家庭総合研究）公開シンポジウム　神戸

6.

7. 高田哲　障害のある子どもやハイリス

ク児家族への発達支援—大学と自治体との連携—赤ちゃん成育ネットワーク第3回研究会　2008年1月13 日　東京

8. 高田哲. 発達障害の診断と支援. ヤンセンファーマ株式会社社内研修会2007年11 月 26 日　神戸

9. 高田哲. 発達障害の診断をめぐって一家族支援の立場から一. 神戸市発達障害支援ネットワーク　講演会　神戸市発達障害支援ネットワーク主催　2007年11月3 日　神戸

10. 高田哲. 発達支援ネットワークの構築について　大阪市家庭相談員研修会2007 年 10 月 19 日　大阪

11. 高田哲.　気になる子ども　三木市教育センター研修会　三木市教育委員会主催　三木市　2007 年 9 月 15 日

12. 高田哲　発達障害の理解　兵庫県音楽療法士認定審査講習会　2007 年 6 月 22 日　兵庫県主催　神戸

13. 高田哲. 特別な支援を必要とする子どもたちの子育てをどう支援するか大学コンソーシアムひょうご　2007 年 6 月 17 日　神戸

14. 高田哲. 発達障害の早期診断と支援沼津市学校保健研究会　特別講演2007 年 5 月 10 日　静岡県沼津

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

保健所における「サポートブック勉強会」について

研究協力者　ひょうご発達障害者支援センター　相談支援員　橋本美恵
主任研究者　神戸大学医学部保健学科　教授　高田哲

研究要旨　近年、発達障害児に関する啓発のために研修会や勉強会がよく実施されるようになってきた。しかし、「発達障害」という一般論だけではなく、一人ひとりの子どもへの関わり方についての細やかな配慮と工夫が望まれている。それには保護者が自分の子どもの姿をよく知ることが重要である。また、子ども達が初めて出会う保健師やボランティアにとっても、子どもの姿を知ることが適切な支援を行うためには不可欠である。ひょうご発達障害者支援センターでは、保護者を対象に「サポートブックを知るための勉強会」を保健所で行ってきた。保護者がサポートブックにまとめることによって、子どもの姿を客観視し、自分の関わり方を振り返る機会にもなっており、保健所での早期支援のひとつの手立てとして大変有用であった。今後も保護者と支援者にとって活用しやすい様式を検討し、より役立つ勉強会になるように努力していくべきと考えられた。

A. はじめに

近年、発達障害のある子どもの早期発見・早期支援の必要性が認識されてきた。両者の中でも早期支援は特に重要な課題となってきている。発達障害がある子どもであっても、その一人ひとりの姿は異なる。子どもたちへの関わり方にその子に合った工夫・配慮をすれば生活がしやすくなり、経験の幅も広がる。「発達障害」という障害に対する啓発だけではなく、子どもの姿を具体的に、保護者を含む支援者が知っていくことが必要である。

一方で、地域での支援体制整備も重要である。特に保健所（保健センター）は発達障害のある親子にとって、初めての相談機関としてだけではなく、継続した支援の場として非常に重要な場となっている。保健所からの依頼により発達障害者支援センター職員は「発達障害の理解と支援」等の講義を保護者や保健師向けに行ってきた。一般的な意味での発達障害に関する知識の普及啓発の機会は増えていったが、一人ひとり違う姿の子ども達を支援者がより深く知るというニーズが生じた。特に幼児期には子どもと関わるにあたり、子どもが何に困っているのか、何をほめられるとうれしいのか、といった具体的な様子を知っていくことから理解が始まるとｋんが得られ考えられる。その意味で子どもの姿を家族自身や支援者がまとめ、整理していく作業は非常に重要である。

発達障害者支援センターでは、当初は、親の会、ボランティア団体など様々な機関において「サポートブックの作成勉強会」を行っていた。しかし、各機関において中心となって継続して携わることのできる人材を確保することは難しかった。そこで、発達障害のある子ども達に業務として関わることの多い保健師とともに勉強会をすることを計画した。勉強会では、発達障害の理解を深めてもらうために、保健師がグループワークのファシリテーターを務めることとした。保健師自身の発達障害への理解が深まれば、サポートブック作成の過程において保護者との良好な関係も築くことができると考えたからである。今回はその勉強会の実際について報告する。

B. 対象および方法

1．目的

①保護者が子どもの姿をよく知り、関わり方について考える機会をもつ。

②保健師がサポートブックを作成する過程を通して地域の子どものことや親の悩みを知り、相談にのるきっかけづくりとする。

2. 内容

プログラム： 講義1時間　グループワーク1時間　　計2時間　を2回又は3回実施。

対象：参加者は、発達の気になる子どもをもつ保護者とし、選定は各機関の保健師が行った。

対象機関：1）平成18年度1年間の取り組みとして県健康福祉事務所及び市町保健センターにて実施（以下A）。2）平成18年度から平成19年度にかけての2年間の取り組みとして市町保健センター及び健康福祉事務所3団体（以下B、C、Dとする）にて「講座」として実施した。

概要を**表1**に示した。Aに関しては「サポートブック勉強会」として3回（月1回　9月～11月）の講座を行い、B、C、Dに関しては、ペアレントトレーニング（家庭療育支援講座）の中で2回の「サポートブック」の講座を実施した。Aでのプログラム内容を**表2**に示した。

表1. 対象機関の概要

	機関名	保健師数 （）は人数	保健師以外のスタッフ	参加者数
A	県健康福祉事務所及び市町保健センター	H18 （5）	施設職員 （2）	H18 (13)
B	市町保健センター	H18 （4） H19 （4）	家庭児童相談員 （2）	H18 (12) H19 （9）
C	市保健センター	H18 （2）	心理士 （1）	H18 H19 H19 （4）		(15)
D	県健康福祉事務所及び市保健センター	H18 (10) H19 (12)	心理士 H18（1） H19（3）	H18 (13) H19 （19）

表2

	内容	講師
1回目	講義 「サポートブックって何だろう」 グループワーク 「まず書いてみよう」	ひょうご発達障害者支援センター 相談支援員
2回目	講義 「サポートブックをつくろう」 グループワーク 「書いたものを見合おう」	ひょうご発達障害者支援センター 相談支援員
3回目	講義と話し合い 「サポートブックを使ったよ」	施設職員

全ての団体において、1回目は「サポートブックを知る」ことを目的にした講義を行った。サポートブック自体が保護者にとって難しいものにならないように簡単な言葉で分かりやすい講義を行った。また、具体的に活用されている例を交え、何のために作るのか、何に役立つかを示した。

グループワークに関しては、勉強会前にスタッフ全員で「グループワークの進め方」マニュアルをもとにワークの目的と司会の進め方と到達点、個別のフォローでの留意点を確認した。実施後は毎回反省会を行い、全体の流れの確認と個別のフォロー状況、次回に向けての確認を行った。Aについては、3回目に成人施設で相談業務に就いている職員が地域資源の利用について話し、その際にサポートブックを利用するときの具体例（ショートステイ、学校など）

を話した。

3. アンケート ： 各機関においてアンケートを実施した。B～D はペアレントトレーニング（全 6 回）の 6 回目終了後に事後アンケートを実施した。

C. 結果

参加保護者アンケート結果より

- 毎日子どもと接しているのに、いざ書こうとすると何もわかっていないことに愕然としました。子どもと、自分とを見つめ直すよい機会、きっかけになりました。
- 子どもを注意深く見ることができました。
- サポートブック作成について、子どもがどういうことが出来て、どういうことが出来ないのかよくわかった。気づかせてくれた。
- 子どものことがよく見えました。
- どんなことができないのかサポートのしかたなど、今まで考えたことのなかったことについて考えるきっかけになりました。
- ひとつの動作でも、出来る部分とそうでない部分が親としても確かめることができて良かったです。
- 子ども自身を見つめる良い機会になりました。
- こういうものがあることも、知らなかったので作る機会を経験させてもらって良かったです。
- 最初は何を記入して良いかわからなかったのですが、回を重ねるにつれ、子どものことを良く見られるようになり、見直すことができたので良かったです。
- 就学にあたり、より具体的に子どものことを観察し記入することができたと思います。
- 今年、年長になりますが、早速使おうかなと思います。
- 小学校で役立てたいと思う。
- 今後の子どもの生活に、いろいろと役立ちそうです。保育園、学校や民間の保育所を利用するときに使用したいと思います。
- 形式にとらわれず、これからも自分なりに工夫して子どもの姿に合った記入のしかたを考えていきたい。今後、きょうだいにも活用していきたい。
- ３ヵ月だけでも成長して書き直したり、書き足したりできたので、ひとつのことを記録することで、自分の成長もみられた。幼稚園に持って見せてみたら、まだわかりにくいことがあった。
- 「できること」「できないこと」がわかり、毎日していることを文章にすることが難しいなと思いました。
- 言葉が難しく、なかなか書くことができなかった。

参加保護者 1 年後のアンケート結果より

- 実家や保育園に預ける時に実際にサポートブックを渡すわけではありませんが、注意点をまとめて伝えることができるので役立っています。今後少しずつ気づいたことをマメに記入していくと要点がはっきりして他人に説明するときに便利です。
- サポートブックを渡すことで、口頭で伝えると忘れてしまうこともあるが、それが防げる。
- 就園時に担任の先生にお見せして効率よく子どもの様子を話せた。
- 就園や就学時に前任の先生に加筆してもらうとスムーズに移行できると思う。
- 子どもを冷静に客観的に見ることができる。

D. 結論

1. 保護者にとって

サポートブックを作成した保護者は子どもの姿をよく知り、理解できることで関わり方について考えることができ始めている。

アンケートからは以下の 3 点の共通点が見えてきた。

① 自分の気づきができ、子どもを深く見ることができた。

② 記録としての利用と子どもの成長を確認できる

③ 人に伝えるときに使いたい。

①に関しては、作成した保護者にとって改めて「子どもの姿」を確認する機会となり、より子どものことを深く見ていこうというきっかけにもなった。他の保護者のサポートブックを見ることで子どもへの関わりに気づく、同じような困ったことに対して子育てのヒントをもらう、自分だけではなかったという思いをもてることにつながっている。

②に関しては、1 回目と 2 回目の間が 3 ヶ月という期間であっても、子どもの成長ぶりを発見して喜びとなった方が多かった。また、記録を残しておくことの大事さに気づいた保護者もいる。

③に関しては、今後人に子どものことを伝えるときの方法としてサポートブックを知ることができたという意見がみられた。但し、引継ぎに使う時の課題として、渡す時期、相手との関係、説明の方法などを留意しておくことが必要である。

2. 保健所で行うことの効果

スタッフが保健師であるということが心強いという声が多かった。子どもが小さいときから関わってもらっており、相談しやすいこともあるだろう。専門機関に細かいことを聞くには遠くて利用しにくいが、保健所であれば足を運んで聞けるという人もいた。サポートブックを通して保健師に子どものことを知ってもらい、他の相談がしやすくなったという声も聞いている。

機関 A では、後日有志により会合が再びもたれ、その後親の会として稼動し始めたという報告を聞いている。保護者同士が出会い、自分だけではないという気持ちによって子育てに前向きになれる、その場の保障をできたといえるのではないだろうか。また、子どもの様子は気になるが病院へいく判断がつかない、親の会に入るには診断名が未だついていないという状態の保護者にとっては、親の会の勉強会には敷居が高い場合もある。保健所で実施することで参加しやすい保護者もいた。　但し、サポートブックの書式に関しては参加者に配慮する必要がある。「障害名」「特性」といった項目に関しては必要性を検討したり、他の表現を代用するなど、参加者や用途に応じて様式を変更していく必要がある。

保健師が進める上での留意点としては、司会者がどの方向へグループワークを導いていくのかが重要であった。ともすれば個人的な相談に陥りがちなグループワークを、各々が子どもの姿を考える機会となるよう牽引していく力量が必要であった。そのためには対象者の親子の様子を把握しておくことやワークのマニュアルにのっとって全スタッフが打ち合わせをしておくことは非常に効果的であった。ワークだけでは話しきれない保護者にとっては、個別の相談や訪問で対応していった。ワークの目標設定を、サポートブックを「作る」ことではなく、まず「知る」ことから始めたことも参加者にとってはハードルが低く、「つくってみよう」と思うきっかけにもなったようである。

また、従来の発達障害理解の講義は 1 回形式が多いが、この「サポートブック勉強会」は 2 回～3 回という複数回で実施した。そのことにより、子どもの変化を確認でき、1 回では書くことができない保護者にとっては再び取り組

むチャンスとなり、期間をおいたことで子どもの姿を思い浮かべる時間もできて書き始めやすかったようである。ある保護者の方が「1回だったら書けなかったかもしれない」と言われた言葉が印象に残っている。

今後の課題としては、保健師が勉強会の講義をし、グループワークを進められるようにしたい。そのためには講義とグループワークの研修会を実施し、経験者を増やしていきたいと考えている。また、地域の親の会と連携し、サポートブックの作成経験者として親の会からも講師を担ってもらうなど保健所から親の会へのつながりももてるように図っていきたい。

E．論文・学会発表

【研究会・研修会などにおける講演】

1. 橋本美恵　子ども達と関わる上で大切にしたいこと　加古川市ファミリーサポートセンター　2007年6月7日　加古川
2. 橋本美恵　発達障害を疑う子どもの保健指導及びフォローにあたって　神戸市発達障害ネットワーク推進室保健師対象研修会
2007年10月19日　神戸
3. 橋本美恵　発達にでこぼこのある子の理解
播磨町NPO法人アエソン講演会
2007年10月26日　播磨町
4. 橋本美恵　障害のある子どもの理解と支援
託児サポーター養成講座
2007年11月9日　稲美町
5. 橋本美恵　「発達障害の特徴をもつ子どもへの関わり方」福崎町保健センター
2008年2月18日　福崎町

【参考文献】

1. 柘植雅義・井上雅彦（2007）：発達障害の子を育てる家族への支援．金子書房
2. 井上雅彦・井澤信三（2007）：自閉症支援はじめて担任する先生と親のための特別支援教育．　明治図書
3. サポートブック．ひょうご発達障害者支援センタークローバー

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

保健師・保育士による発達障害児への早期発見・対応システムの開発

分担研究者　神戸大学医学部保健学科教授　松田宣子

研究要旨：平成19年度に「発達障害児とその保護者への具体的支援」をテーマに研修会を実施し、参加した保健師および保育士から、その成果を得られたので報告する。研修会終了後に調査用紙を配布し、自記式で回答を得た。有効回答は、保健師64名、保育士・幼稚園教諭47名であった。結果、「発達障害児とその家族のための支援教室の実際について」は「よくわかった（大変よくわかった。まあまあよくわかった）」が保健師80%、保育士・幼稚園教諭59%であった。「幼児期の発達障害児への関わり方、支援の実際」は「よくわかった」が保健師79%、保育士・幼稚園教諭49%であった。「発達障害児の療育の実際」は「よくわかった」が保健師76%、保育士・幼稚園教諭47%であった。「発達障害児とその保護者へのサポートブックの活用」は「活用したい」が保健師88%、保育士・幼稚園教諭57%であった。発達障害児と保護者への必要な支援スキルは何かにについて尋ねると、保健師及び保育士・幼稚園教諭とも最も多かったのは家族への支援スキルであった。

A. 目的

平成17年度および18年度に保健師・保育士による発達障害児への早期発見・対応の現状の調査実施と分析、研修会の開催と成果の分析を行なってきた。その成果を踏まえて今回、発達障害児とその保護者への具体的支援をテーマに研修を企画し、実施した。その成果を明らかにすることを目的として本研究に取り組んだ。

B. 対象及び方法

1. 対象

研修会に参加した兵庫県下の保健師・保育士・幼稚園教諭である。

2. 方法

研修会に参加した保健師及び保育士・幼稚園教諭に研修会後調査票を配布し、自記式で調査票に記入してもらい、回収する。

調査項目は、研究会で実施する具体的支援についてそれぞれの理解度及び活用度について4段階のリカート尺度で回答を得る。

データ分析方法は、統計ソフトSPSS15用いて統計的に行なう。

3. 研修会

【テーマ】発達障害児とその保護者への具体的支援について

【日時】平成20年1月26日14：00～17:00

【場所】大学研修室

【研修会内容】

講演1「発達障害児と家族のための支援教室運営とその課題-神戸市（灘区、須磨区）での家族支援モデル教室の経験を通して-」

神戸大学医学部保健学科教授　高田哲

講演2「導入に時間を要した2症例を通して支援と連携を考える」

姫路市総合福祉通園センター診療所長

小寺澤敬子

講演3「幼児期における発達障害児への支援の実際」

神戸親和女子大学福祉臨床学科准教授

石岡由紀

講演 4「自閉症療育の実際」

発達障害児支援教室「ほっと」代表

山根弘子

講演 5「発達障害児と保護者へのサポートブックの紹介」

ひょうご発達障害者支援センタークローバー

橋本美恵

自由討論、質疑応答

C. 結果

1. 保健師　有効回答数：64 人

1）保健師の所属

表 1. 現在の所属

n=64

	人	%
都道府県保健所	13	20.3
政令市・中核市保健所	13	20.3
市町村保健（福祉）センター	35	54.7
その他	3	4.7

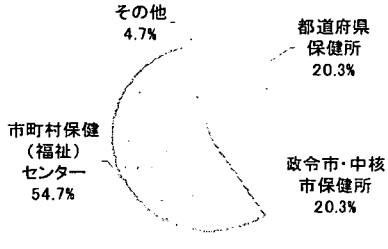

図 1. 現在の所属

保健師の所属は、市町村保健センター54.7%で最も多く、都道府県及び政令市・中核市は 20.8%と同じであった。

2）保健師経験年数

平均±SD：11.8±11.1 年

表 2. 経験年数

n=63

経験年数	人	%
1～ 5 年	27	42.9
6～10 年	9	14.3
11～15 年	10	15.9
16～20 年	4	6.3
21～25 年	1	1.6
26～	12	19.0

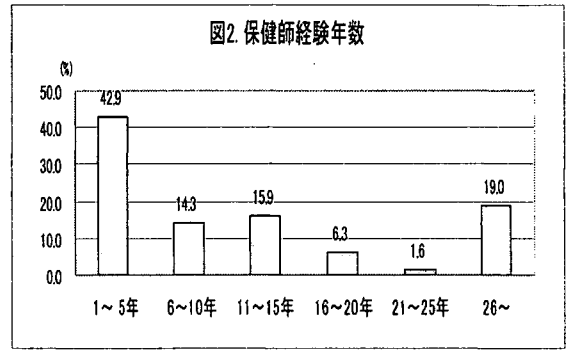

図 2. 保健師経験年数

経験年数は、5 年未満が 42.9%と約 4 割を占めた。

3）現在の活動領域

表 3. 現在の活動領域（重複回答）

n=64

活動領域	人	%
母子保健	59	92.2
成人保健	30	46.9
精神保健	22	34.4
感染症	11	17.2
介護保険	5	7.8
その他	11	17.2

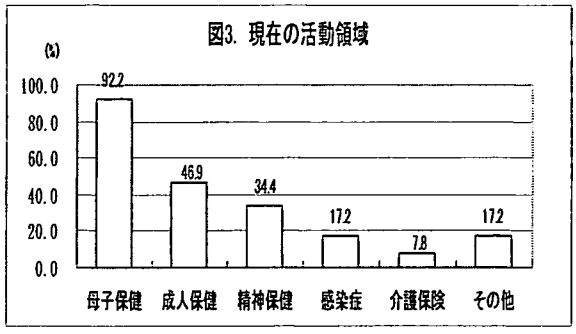

図 3. 現在の活動領域（重複回答）

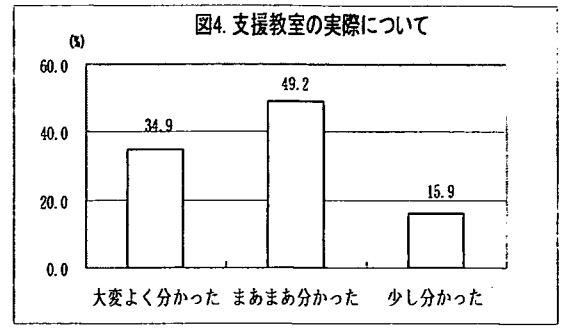

図 4. 支援教室の実際について

現在の活動領域は、母子保健が 8 割、成人保健 4 割、精神保健 3 割であった。

4) 発達障害児の教室の担当について

表 4. 発達障害児の教室の担当

n=64

	人	%
担当している（したことがある）	48	75.0
担当していない（したことがない）	16	25.0

発達障害児への教室の担当について 75%が担当をしている。

5) 発達障害児とその家族のための支援教室の実際について

表 5. 支援教室の実際

n=63

	人	%
大変よく分かった	22	34.9
まあまあ分かった	31	49.2
少し分かった	10	15.9
あまり分からなかった	0	0.0
分からなかった	0	0.0

発達障害児とその家族のための支援教室の実際については「大変よくわかった」34.9%「まあまあわかった」49.2%であり 84.1%の者がよくわかったと回答している。

6) 幼児期の発達障害児への関わり方、支援の実際について

表 6. 幼児期の発達障害児への関り方、支援の実際

n=63

	人	%
大変よく分かった	17	27.0
まあまあ分かった	33	52.4
少し分かった	12	19.0
あまり分からなかった	1	1.6
分からなかった	0	0.0

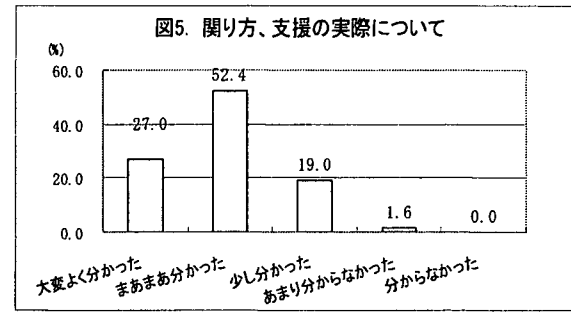

図 5. 関わり方、支援の実際について

幼児期の発達障害児への関わり方、支援の実際について「大変よくわかった」27.0%「まあまあわかった」52.4%であり 80%の者がよくわかったと回答している。

7) 発達障害児への療育の実際について

表 7. 発達障害児への療育の実際

n=62

	人	%
大変よく分かった	18	29.0
まあまあ分かった	35	56.5
少し分かった	9	14.5
あまり分からなかった	0	0.0
分からなかった	0	0.0

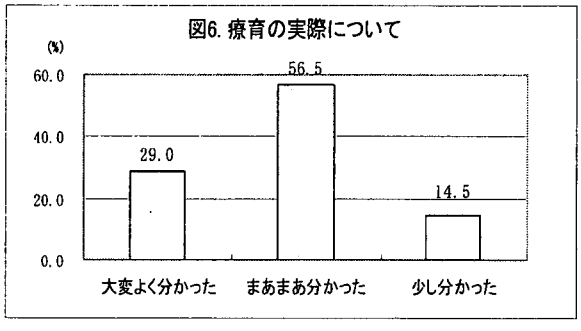

図 6. 療育の実際について

発達障害児への療育の実際について「大変よくわかった」29.0%「まあまあわかった」56.5%であり 85%の者が「よくわかった」と回答している。

8) 発達障害児と家族へのサポートブックの活用について

表 8. 発達障害児と家族へのサポートブックの活用

n=61

	人	%
大変活用したい	33	54.1
まあまあ活用したい	21	34.4
少し活用したい	6	9.8
あまり活用しない	1	1.6
活用しない	0	0.0

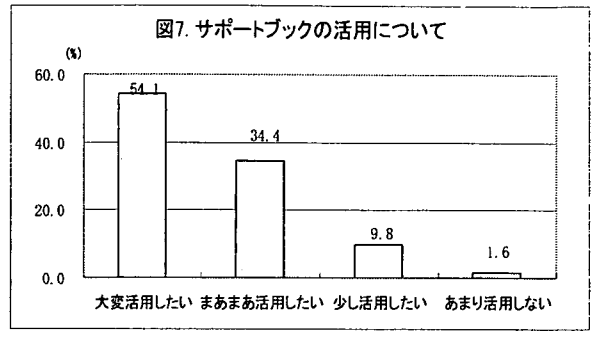

図 7. サポートブックの活用について

発達障害児と家族へのサポートブックの活用について「大変活用したい」54.1%、「まあまあ活用したい」34.4%であり、88%の者が活用したいと回答している。

9) 発達障害児への支援のため保健師に必要なスキルについて

表 9. 発達障害児への支援のため保健師に必要なスキル（重複回答）

n=63

	人	%
早期発見スキル	41	65.1
専門機関への調整スキル	40	63.5
発達障害児と家族との関わり方	53	84.1
発達障害児の教室運営	24	38.1
その他	7	11.1

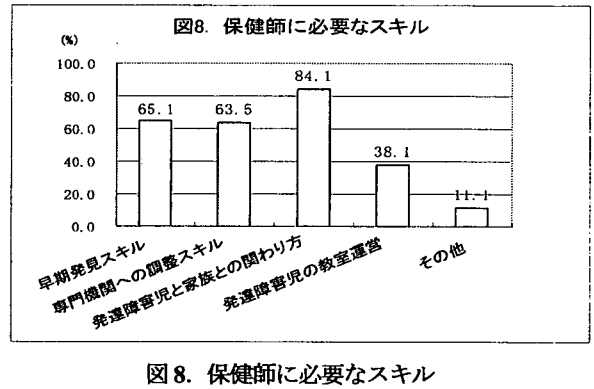

図 8. 保健師に必要なスキル

発達障害児への支援のために必要な保健師のスキルについて多い順から「発達障害児と家族との関わり方」84.1%、「早期発見スキル」65.1%、

「専門機関への調整スキル」63.5%であった。

10）発達障害児への支援のための保健師に必要なスキルで不足しているものについて

表 10. 保健師に最も不足しているスキル

n=59

	人	%
早期発見スキル	14	23.7
専門機関への調整スキル	13	22.0
発達障害児と家族との関わり方	24	40.7
発達障害児の教室運営	6	10.2
その他	2	3.4

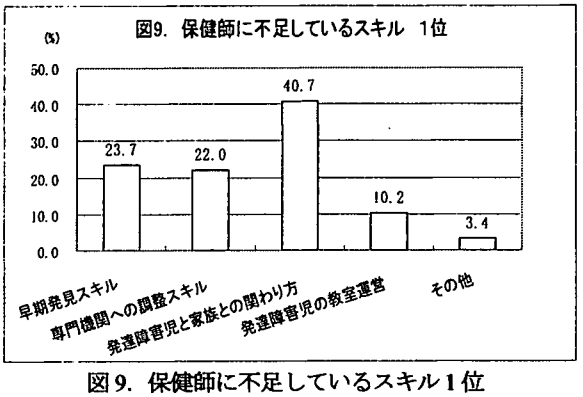

図 9. 保健師に不足しているスキル 1 位

表 11. 保健師に不足しているスキル 2 位

n=58

	人	%
早期発見スキル	14	24.1
専門機関への調整スキル	13	22.4
発達障害児と家族との関わり方	18	31.0
発達障害児の教室運営	12	20.7
その他	1	1.7

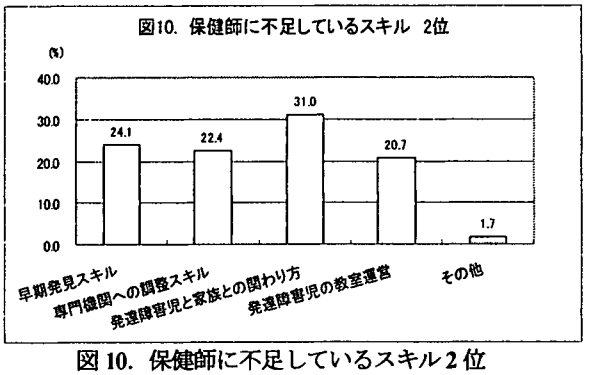

図 10. 保健師に不足しているスキル 2 位

表 12. 保健師に不足しているスキル 3 位

n=55

	人	%
早期発見スキル	16	29.1
専門機関への調整スキル	16	29.1
発達障害児と家族との関わり方	12	21.8
発達障害児の教室運営	9	16.4
その他	2	3.6

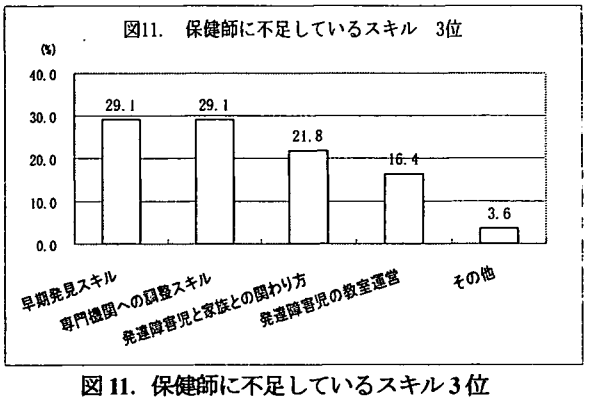

図 11. 保健師に不足しているスキル 3 位

2. 保育士・幼稚園教諭　有効回答数：47 人

1）現在の所属

表 11. 現在の所属

n=47

所属機関	人	%
保育所（園）	28	59.6
幼稚園	13	27.7
市町村保健（福祉）センター	2	4.3
子育て支援センター	1	2.1
療育機関	2	4.3
その他	1	2.1

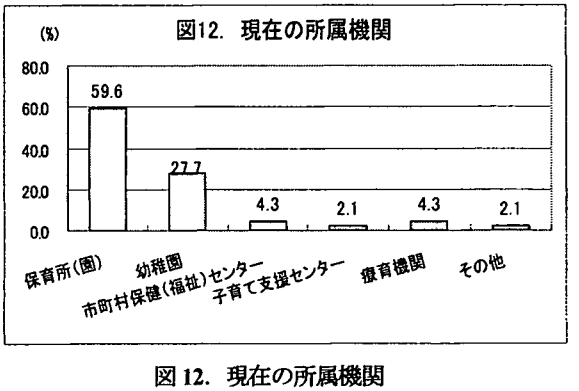

図 12. 現在の所属機関

参加者で回答のあった保育士・幼稚園教諭の所属は、保育所（園）が60%で次いで幼稚園が約30%，その他10%であった。

2）経験年数

表 12. 経験年数

n=43

経験年数	人	%
1～ 5年	9	20.9
6～10年	8	18.6
11～15年	6	14.0
16～20年	5	11.6
21～25年	4	9.3
26～30年	7	16.3
31～	4	9.3

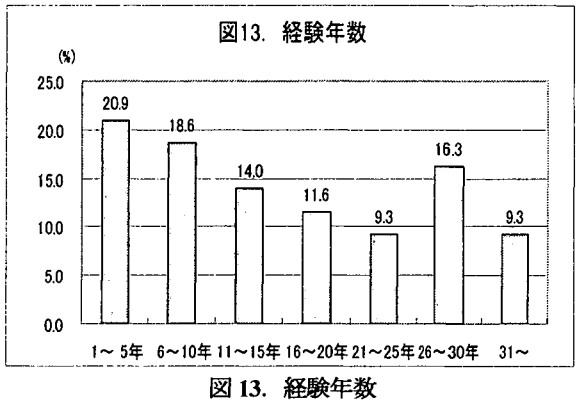

図 13. 経験年数

経験年数は、1～5 年未満が 20%、6 年～10 年未満 19%、26 年～30 年未満の順に多く、経験の浅い群とベテランの群とあった。

3）発達障害児と家族への関わりについて

表 13. 発達障害児と家族への関わり

n=41

	人	%
関わりをしたことがある	35	85.4
関わりをしたことがない	6	14.6

発達障害児への関わりについて「あり」が95%とほとんどが関わりを持っていた。

4）発達障害児とその家族のための支援教室の実際について

表 14. 支援教室の実際について

n=44

	人	%
大変よく分かった	6	13.6
まあまあ分かった	20	45.5
少し分かった	17	38.6
あまり分からなかった	1	2.3
分からなかった	0	0.0

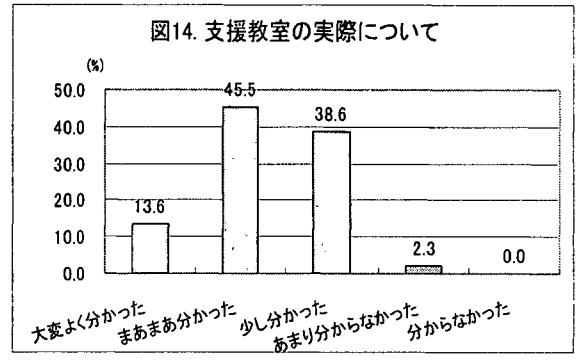

図 14. 支援教室の実際について

発達障害児とその家族のための支援教室の実際について「分かった」（大変よくわかった、まあまあ分かった）が59%であり、6割を占めた。

5）幼児期の発達障害児への関わり方、支援の実際について

表 15. 児へのかかわり方、支援の実際

n=47

	人	%
大変よく分かった	7	14.9
まあまあ分かった	16	34.0
少し分かった	24	51.1
あまり分からなかった	0	0.0
分からなかった	0	0.0

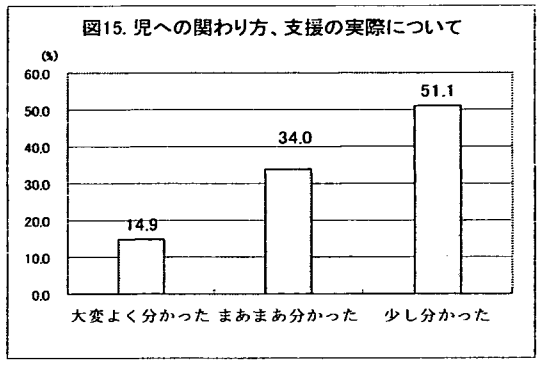

図 15. 児への関わり方、支援の実際について

幼児期の発達障害児への関わり方、支援の実際については「少し分かった」も 50%、「まあまあ分かった」34%であった。

6) 発達障害児への療育の実際について

表 16. 発達障害児への療育の実際

n=47

	人	%
大変よく分かった	5	10.6
まあまあ分かった	22	46.8
少し分かった	18	38.3
あまり分からなかった	2	4.3
分からなかった	0	0.0

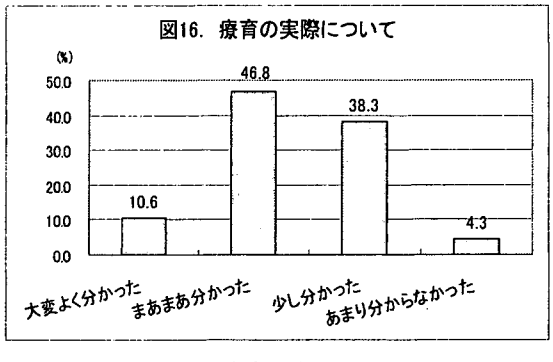

図 16. 療育の実際について

発達障害児への療育の実際については「まあまあ分かった」が 46.8%と半数を占め次いで「少し分かった」が 38%であった。

7) 発達障害児とその家族への支援と連携

表 17. 児とその家族への支援と連携

n=47

	人	%
大変よく分かった	6	12.8
まあまあ分かった	20	42.6
少し分かった	20	42.6
あまり分からなかった	1	2.1
分からなかった	0	0.0

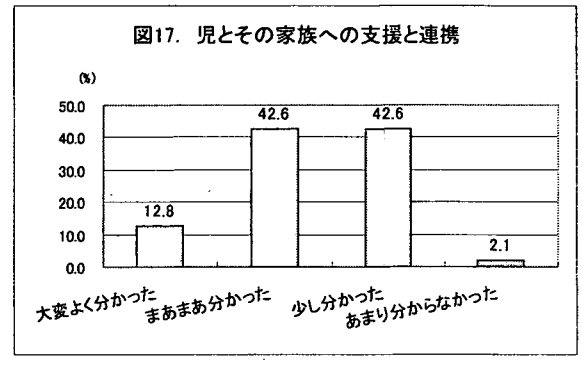

図 17. 児とその家族への支援と連携

発達障害児とその家族の支援と連携については、「まあまあ分かった」と「少し分かった」がそれぞれ 42.6%であり、80%を占めた。

8) 発達障害児と家族へのサポートブックの活用について

表 18. サポートブックの活用

n=44

	人	%
大変活用したい	15	34.1
まあまあ活用したい	10	22.7
少し活用したい	18	40.9
あまり活用しない	0	0.0
活用しない	1	2.3

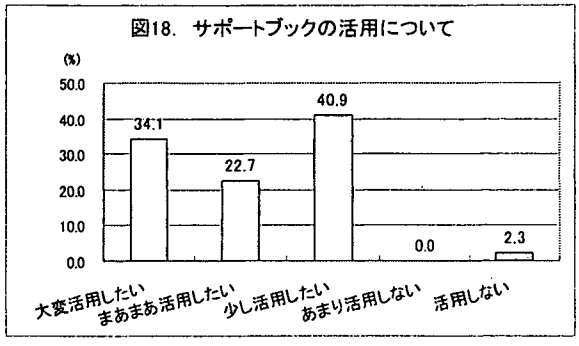

図 18. サポートブックの活用について

発達障害児と家族へのサポートブックの活用について「少し活用したい」が 40%、次いで「大変活用したい」34.1%であった。

9) 発達障害児への支援のため保育士に必要なスキルについて

表 19. 保育士に必要なスキル（重複回答）

n=46

	人	%
早期発見スキル	18	39.1
専門機関への連絡、相談	18	39.1
発達障害児と家族との関わり方	37	80.4
発達障害児の保育	30	65.2
その他	6	13.0

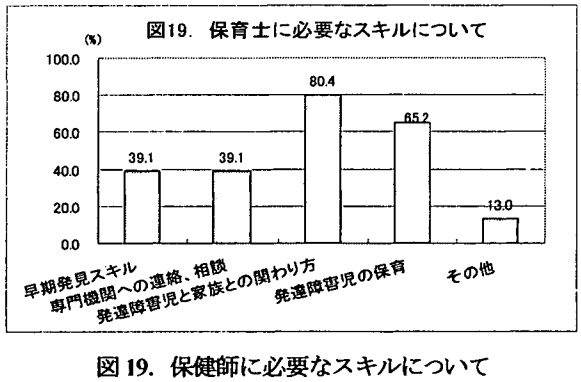

図 19. 保健師に必要なスキルについて

発達障害児への支援のため保育士に必要なスキルについては「発達障害児と家族との関わり方」が 80%であり、次いで「療育」65%であった。

10) 発達障害児への支援のため保育士に必要なスキルで不足しているものについて

表 20. 保育士に不足しているスキル　1 位

n=40

	人	%
早期発見スキル	8	20.0
専門機関への連絡・相談	7	17.5
発達障害児と家族との関わり方	13	32.5
発達障害児の保育	11	27.5
その他	1	2.5

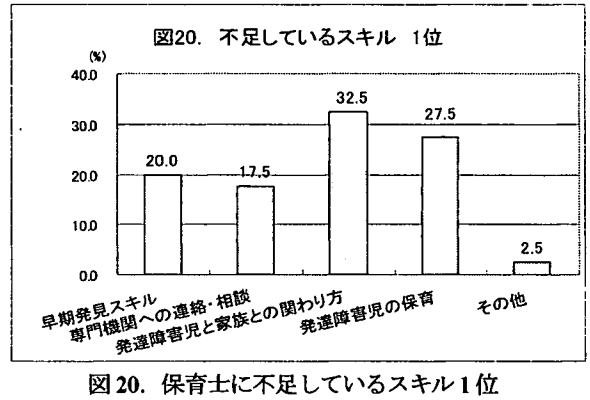

図 20. 保育士に不足しているスキル 1 位

発達障害児への支援のため保育士に必要なスキルで不足しているものは、「達障害児と家族とのかかわり」、「保育」、「早期発見スキル」の順であった。

表 21. 保育士に不足しているスキル　2 位

n=41

	人	%
早期発見スキル	6	14.6
専門機関への連絡・相談	9	22.0
発達障害児と家族との関わり方	11	26.8
発達障害児の保育	15	36.6

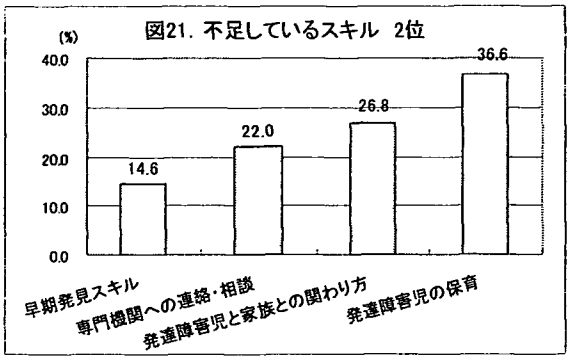

図 21. 保健師に不足しているスキル 2 位

表 22 保育士に不足しているスキル 第 3 位

n=38

	人	%
早期発見スキル	6	15.8
専門機関への連絡・相談	11	28.9
発達障害児と家族との関わり方	13	34.2
発達障害児の保育	8	21.1

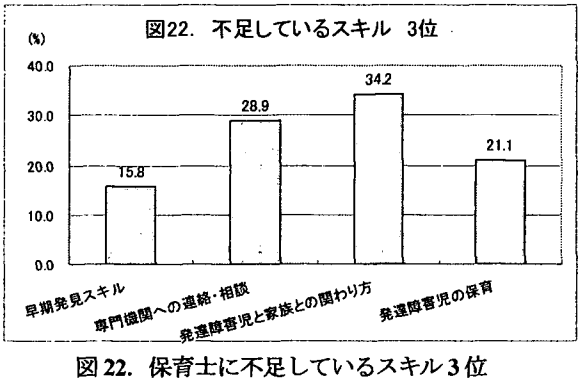

図 22. 保育士に不足しているスキル 3 位

C. 考察

1. 平成 19 年度研修会の成果

保健師にとって今回の研修会の成果は具体的支援についてほとんどの方が理解でき、今後の活動に生かしていけると考える。支援スキルについては、家族支援が最も必要と回答している。

発達障害児をもつ母親、保護者は、障害を受容することや診断がつくまでの保護者の苦悩、子どもとの関わり方が難しく、つらい思いをもっており、「時には虐待に近い関わりをしていた」[1] と述べられており、母親、保護者への支援の難しさがある。就学以前に地域で関わることのできる保健師は、このような支援の難しい家族への支援スキルをつけていくことは、必須であり、求められている。また、早期発見スキルについては、第 2 位に必要と回答があり、発達障害児を支援していく上での保健師の大きな役割であると考える。発達障害児を持つ母親は「診断がついてから、この子どもに何をすればよいかがわかり、子どもとうまく関われるようになった」[2] と述べており、保健師からの早期発見してもらうことを希望していた。小寺澤らは[3]、軽度発達障害児の持つ問題は、個人差が大きいことや障害が軽度であれば発見がされにくく、理解されにくく、間違えた対応がされていると述べている。保健師は、就学前に母子と出会う職種であり、早期発見スキルと合わせて発達障害児の理解と合わせて療育や保護者の発達障害児への関わりなどを支援できることが求められる。今後家族支援スキルやさらなる早期発見・対応スキルへの教育プログラムを開発していくことが必要である。

保育士・幼稚園教諭にとって今回の研修会の成果は、具体的支援について保健師ほどは高くないが、ほとんどの方が理解でき、今後の活動に生かしていけると考える。支援スキルについては、保健師と同様に家族支援が最も必要と回答している。今回の研修は、療育や個別の支援の内容については、保育士・幼稚園教諭にとっては、直接的な業務でないこともあり、理解が難しかったと考える。支援スキルの必要性では保健師と同様に家族への支援スキルを第 1 位にあげていたが、第 2 位としては保育をあげており、同時に不足スキルとしても集団における保育、教育と回答されている。保育士・幼稚園教諭は、集団のなかでの保育や教育を実践しており、その中での児へのかかわりの難しさを経験しているため、集団の中における発達障害児への保育・教育へのスキルを強く望んでおり。今後、集団おける対応の教育プログラムの開発が

求められる。

D. 結論

以上、保健師と保育士・幼稚園教諭の研修会の成果について述べてきた。今後は、専門性が異なり、求められるスキルの違いがあるため、それぞれ別の専門性に応じた教育プログラムを開発していくことが必要と考える。

E. 引用参考文献

1. 西村佳恵、村上佳世、松田宣子、小門美由紀、地域における就学後の発達障害を持つ子どもと家族の生活の現状とその支援、
平成１９年度神戸大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究、ｐ11、2008
2. 西村佳恵、村上佳世、松田宣子、小門美由紀、平成１９年度神戸大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究、ｐ12、2008年
3. 小寺澤敏子他、就学前軽度発達障害児を対照とする相談事業の紹介、小児の精神と神経、46（4）、ｐ285－289, 2008
4. 藤井千恵、松田宣子、地域における発達障害を持つ親への支援に関する研究―保健師の支援に焦点を当てて―、平成１９年度神戸大学医学部保健学科看護学専攻卒業研究、2008

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

【学会発表】

1）高田哲、松田宣子. 発達障害児の早期支援・支援に関する保健師の意識と役割. 第 49 回日本小児神経学会総会 2007年 7月5-7日 大阪
2）高田哲. 松田宣子、山根弘子、他. 家族教育と専門職教育を同時に行う発達支援モデル教室の運営 第 54 回日本小児保健学会 2007年9月20-22日 前橋
3）松田宣子、坂間伊津美、小門美由紀、高田哲. 育児グループの効果に関する研究. 第54回日本小児保健学会 2007年9月20-22日 前橋

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

就学前発達障害児の評価・支援に関する研究

分担研究者　小寺澤敬子　姫路市総合福祉通園センター

－導入に時間を要した2症例を通して支援と連携を考える－

研究要旨：発達障害児を早期に発見して支援して行くことは重要であるが、障害に気付かれても療育の流れにのって行けない親子も少なからず存在する。早期発見が一人歩きしないために、支援者達が連携をとりあっていくことの重要性を、保健所と専門機関の連携により療育が継続された2症例を通して確認した。

A. 研究目的

発達障害児への早期からの理解と対応が必要であるという認識は広まってきており、早期発見のために、従来の1歳6ヶ月健診や3歳児健診の充実に加えて、就学前の5歳児健診についても多くの地域で検討されている。一方で、健診で遅れや行動の問題を指摘されても、適切な支援を受けることなく就学してしまう子どもも少なからず存在する。そこで、今回、療育の導入に時間を要した2症例を通して、保健所と専門機関の連携の重要性について考察したい。

B. 対象

1. 症例1

ことばの遅れを主訴として、2歳8ヶ月の時に姫路市総合福祉通園センター（以下センターと略す）を初診した男児。2歳と4歳上の二人の兄がいる。運動発達は順調であったが、1歳6ヶ月健診で言葉の遅れを指摘された後、保健所での育児教室と心理相談に参加していたが、兄の行事などで休むことが多かった。2歳8ヶ月の時、より専門的な療育が必要な子として、保健所からセンターを紹介された。センターでは受診までの経過を聞いた上で、医師、ケースワーカー、臨床心理士、作業療法士、言語聴覚士、保育士の多職種で発達検査や遊びを通して評価した後、「自閉症の疑い」があるとご両親に伝え、センターでの療育を勧めた。けれども、ご両親は、指摘されたことについては理解できるが、児は大きく変わってきていることと、二人の兄の子育てに手がかかる時期であるため、しばらく様子をみたいと通うことを拒否された。そこで、センターから担当保健師に連絡をとり、センターでの様子を伝えた上で家庭訪問をしてもらった。少し時間はかかったが、お母さんから、子どもが楽しく遊べる所を紹介してほしいと希望があり、保健所で行われているグループ活動に通うようになった。

この時期の子どもの様子は、人への興味はなく、楽しめる活動もなく、ただ、走り回り、介入されると怒っていたが、保健所のグループ活動に続けて通うことで、手遊びが好きになり、粘土遊びに集中するなど、